

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	松井秀親教授送別の辞
別タイトル	Ferewell Professor Hidechika Matsui
作成者（著者）	並木, 温
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(1). p.7 7.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r005
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD14358112">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD14358112</a>

# 松井秀親教授送別の辞

並木 温

東邦大学医学部教育開発室教授

松井秀親教授は、2002年に東邦大学医学部英語学研究室教授として赴任されました。東京外国語大学をご卒業され、その後米国有数の教育プログラムを有する米国イリノイ大学大学院英語教育研究科で修士課程を修了され、文系大学での助教授を経験されてからの着任でした。本学へのご着任当初は医学はもちろんのこと自然科学系の世界は全く初めてであり、大いなるカルチャーショックを受けられたようです。医学部特有の(?)上下関係になじむのも、なかなか苦勞されたそうです。

2004年4月には東邦大学医学部国際交流センター長にご就任、英語学研究室教授との兼任ではありましたが、東邦大学医学部の国際化の流れと共に、次第にこちらのお仕事の比重が高くなって行きました。2010年には東邦大学全体の国際交流センター長にも就任されました。国際交流センター長として多くのことを成し遂げられましたが、特に諸外国の大学との交流覚書(Memorandum of Understanding: MOU)の締結の促進と4大学ジョイントセミナーの発展にご尽力されました。4大学ジョイントセミナーとは本学とのMOU締結校であるチェンマイ大学(タイ)、ソクラ王子大学(タイ)、昆明医科大学(中国)がbiomedical scienceの分野における学術交流と親睦を促進するために隔年で実施しているもので、昨年(2015年)で第9回の開催を数えました。

私が医学部臨床実習運営委員長を務めておりましたときに、本学医学部の学生が正規のカリキュラム(6年次の選択制臨床実習)として海外の病院に行つて、十分な学びができるだけの英語力があるかどうかを評価する英語面接試験の面接官を、何年間か一緒にさせていただきました。松井先生の英語はややブロークンながらも外国人にもわれわれ日本人にも分かりやすい発音であり、何を言わんとしているかの説明が非常に丁寧でありました。また中国医科大学、東京女子医科大学と本学とのジョイントセミナー(2011年)や昆明医科大学で開催された第8回4大学ジョ

イントセミナー(2013年)で講演する機会をいただきご一緒した際には、海外の方々との異文化交流を本当に心の底から楽しんでおられることが見て取れました。また大好きなお酒を飲むピッチも、海外においても日本においてと変わらず、もしかしたらもっと早かったのかもしれませんが。

MOU締結校などからの海外の学生や医師の本学への受け入れも積極的に進められ、「外国人がいつもキャンパスを歩いている大学にしたい」とよくお話しされておりました。「国際化を進めることにより学生には文化や価値観の多様性に気づいて欲しい、そしてそのことが、医療人としての将来に必ずつながる。相撲のように海外の人が加わることにより変えなければならないところは変える、でも変えるべきでないところは変えない、それが国際化だ」松井先生の一貫したお考えです。

松井先生は現在大森病院の私の外来に通院されております。ご本人の許可をいただいてお書きしておりますが、ある種の生活習慣病です。毎回血液検査を行っておりますが、その結果に一喜一憂、非常に人間味のあるリアクションで、いつも外来で失礼ながら楽しませていただいております。お若いときからの酒豪ぶりにはあまり変化はないようですが、最近では「赤ちょうちん」の料理はあまりおいしく感じなくなったとのことで、ご自分で料理を作る機会が増えていくとのことです。またアドバイスを忠実に守られ、現在週1回プールで泳がれております。その甲斐あって、最近検査データがずいぶん改善して来ております。

ご退任後少しお休みになった後、小説の執筆に秘かな情熱を燃やされております。もともと東京外国語大学に入学されたのも「海外の文学に惹かれて」とのことでした。もしかしたら数年後、史上最年長の文学賞受賞者が彗星のごとく現れて文壇を騒がせるかもしれません。その日までどうかお身体を大切に、お酒もほどほどにしてご自愛下さいますようお願いして、送別の辞といたします。